

「イエスの宣教は、命の充溢に向けたすべての生けるものへの愛である」

金 容福

(翻訳：眞野玄範)

- I -

アジアにおけるキリスト教宣教史を読む

イエス以来の宣教論はキリスト教共同体による宣教の三段階によって形成されてきた。第一は、原初のアジアないしは西アジアのキリスト教共同体の宣教である。これは西へと、また東へと展開した。西方への展開は帝国の権力と深い関わりを持つようになった。東方への展開が存在する権威^[1]と一体となって確立されたことは一度もない。

ガリラヤのイエスの宣教は、エジプト、バビロニア、ギリシア、ローマの諸帝国の下における信仰共同体の預言者的、メシア的伝統が収斂した中から現れた。それは初代キリスト教共同体の新しい信仰と宣教へと展開した。それは反帝国主義的で、抑圧された諸民族（民衆^{ミンジュン}）の社会—宇宙的経験に深く根ざしたものだ。はつきりしていることは、これは（西）アジアの信仰共同体の経験であったということである。

西方への宣教運動は、西方諸帝国との複雑な権力関係を作り出していった。キリスト教共同体の宣教は、ローマ帝国と、また後にはビザンチン帝国、大英帝国、その他との共生的な権力関係へと展開した。それは際だって政治的な進展であった。キリスト教は、歴史を通じて、諸帝国からの、後には西欧近代の国民国家の形における植民地主義的権力からの、ある種の政治的後援を受けてきたのである。1910年のエジンバラ宣教会議は、キリスト教宣教のこの展開の頂点であった。今や宣教論は、世界の諸民族に対する、西欧の経済的、政治的、文化的、宗教的な支配のイデオロギーとなっている。また、今日、それは地球規模の帝国と密接に提携したものである。キリスト教根本主義やキリスト教シオニズムに見られるように、宣教運動の中には「グローバルなキリスト教世界」の政治的複合体に深く関わっているものもある。実際、これは、全世界のキリスト教運動の主流に

おいて支配的で、西欧の帝国宗教としてのキリスト教に対して全世界で抵抗を作り出しているのである。

また、キリスト教は西欧の資本主義との共生関係を育み、今やグローバルな市場におけるグローバルな資本主義との関係を発達させている。近代における資本主義の歴史は、財産の私有権を正当化して暴利を貪ることを神からの祝福とする経済の宗教として、キリスト教を加担させてきた。エキュメニカル運動は、その預言者的な証しにおいて、このグローバル経済の歴史を、すべての生けるもの命の充溢に向けられた神の「オイコノミア」へと変えられなかった。近代世界の歴史は、キリスト教から神学的な後援を受けて、また政治的経済的な正当性を与えられて、技術官僚的な発展の絶頂に達した。技術官僚制は、その市場システムにおいて（企業資本主義の国家横断的な体制による支配によって）、その地政学的ヘゲモニーにおいて（地球規模の帝国による軍事的支配によって）、その文化ヘゲモニーにおいて（仮想空間および現実空間におけるメディアとコミュニケーションの形態において）、グローバリゼーションの駆動エンジンであり、権力体制である。

西欧の植民地主義諸勢力に対する民族解放闘争への参加にも関わらず、またアジア民衆の真の宗教となることを目指した様々な形態と次元における、エキュメニカルな、また神学的な、土着化への苦闘にも関わらず、近代におけるアジアのキリスト教は、大体において、この複合的な発展の延長となっている。そのアジア的なアイデンティティは、元来のアジアの根を失って、アジア大陸を覆う西欧の文化的な雲の中を漂っている。アジアでキリスト教諸教会は、その植民地主義的、帝国主義的な支配との政治的な結びつきと、その資本主義との経済的な共生関係と、それが西欧の哲学、科学、技術に根ざしていることにおいて、アジア民衆からの大きな反発を経験しているところである。

東北アジアでの西欧の権力や文化との関わり合いにおいて、国家の独立と社会の発展のための闘いの最中にも、我々は西欧の文化、すなわち科学と技術を、政治的近代化のために自由主義と社会主義という政治的イ

[1] powers-that-be: ロマ 13:1 の表現から（新共同訳では「今ある権威」と訳されている）。

デオロギーを、またグローバル化した資本主義経済を、受容してきた。しかし、この歴史は、民衆の歴史に深く根ざして豊かに継承されてきた命の知恵を失う悲劇的な物語であった。アジアのキリスト教は未だに、そのすべての生けるものための命の知恵の水源としての霊的な基礎ないしは位置を見いだしていない。

東北アジアにおいて、またアジア全域において、キリスト教運動のアイデンティティは根本的に問われている。キリスト教という宗教の政治的、経済的、文化的なアイデンティティの問題は未だに解決していない。キリスト教信仰の霊的なアイデンティティは、アジアにおけるキリスト教史によって暗い影を落とされている。今日、これは重大な論点となっている。我々の問いは、では、どこから省察を始めるのか、ということである。

イエスの、命への愛の運動

我々の提題の始めは次の通りである：「宣教としてのイエスの運動は、すべての生けるものへの愛の運動の、初めであり、終わりである」。それは、東アジアの表現では、すべての生けるものへの命の「太極」である。これを我々の省察において転回点となる命題にせねばならない。このことは、ただ過去と現在の宣教論を今日のグローバルな権力のイデオロギーの重要構成要素として解体することを意味するだけでなく、グローバルな帝国と市場を支配する権力体制をその技術官僚的な文化と共に解体することを意味する。

すべての生けるものの中におけるイエスの愛の回復と復興は、愛の宣教の堅固な基礎となるだろう。すべての生けるものへの命が、新たな宣教論的思考の枠組みとして提起されるのである。

1. ガリラヤ人イエス

ガリラヤは西アジアの命の知恵の全てが流れこんで帝国に抗する新しい命の地平を開いた重要な場所である。これが聖書の語る物語である。古代の諸帝国の抑圧的権力に対する民衆とすべての生けるものの抵抗がその核にあるという点で、この物語は政治的である。この物語は政治的な意味だけでなく、深い社会的な含意を持つ。宗教的文化的な知恵がイエスの小さな地域共同体に収斂してすべての生けるものの中における愛の運

動の生々たる新たな軸を開いたという意味で、この物語は文化的である。それは、すべての生けるものへの愛の宇宙的枠組みである。これら全ては、あらゆる生けるものへの命の岐路における、「場(トポス)」と「時(カイロス)」の新たな転回点の形成を意味している。

2. ガリラヤはアジアである

イエスの物語は、ガリラヤでその新しい出発を画した。ガリラヤはすべての生けるものへの共同体の命を宿す宇宙的な場所であり続けている。ガリラヤは、地方的、地域的、世界的、宇宙的な場であり、この土地のユニークな歴史はイエスの物語と結ばれている。その歴史は、政治的、経済的、生態学的な相において、宇宙のすべての命の場と「同一の広がりを持つ」。しかし、それはまた真にアジア的であって、西欧的ではない。地理的に、人類学的に、言語学的に、文化的に、宗教的に、そして特に政治的に、ローマ帝国の西欧の歴史とは区別されるのである。それはローマ帝国とその他全ての諸帝国に対する抵抗の場である。支配勢力に抵抗する命の知恵は、このアジアの土壌において起こったのである。それは、すべての生けるものにおけるイエスの愛に結晶化されている。このイエスの物語はガリラヤのものである。イエスの愛の運動はガリラヤの運動である。そこで始まったのである。我々が関心を持つのは、この運動のアジアにおける物語である。ただその根においてだけではなく、そのアジアの土地への展開に対して関心を持つのである。この運動が、存在する権威との関係を断ったことは大きな意義を持つ。そればかりでなく、アジアの命の知恵や、すべての生けるものへの命への愛のアジアの伝統と、この運動が積極的に関係を持ったことは、我々の考察にとって重大なことと考えられるべきである。「すべての生けるものへの命が充溢するように仕えよ。」これが命の知恵である。キリスト教会は、そのイデオロギーたる宣教論に妨げられ、アジアの命の知恵の光を見ることができなかったのだ。

3. 命への愛のアジアにおける収斂

アジアの愛の諸伝統はイエスの愛の運動の転回点において交わった。アジア諸帝国の「知恵」と権力は、アジアのイエスの愛の知恵と対決した。エジプト、バビロニア、ギリシア、ペルシアの諸帝国は、権力の「神話」の故に、すべての生けるものへの愛の知恵を統合する

ことができなかつた。しかし、それらは、命の知恵がそこから起こってガリラヤ人イエスの愛の転回点へと収斂する背景を提供したのであった。権力への抵抗は命の知恵の蓄積を意味するからである。イエスの愛の運動は、アジアで歴史的過程を経る中で、アジアの愛の知恵と合流した。貪欲の体制に対する仏陀の憐れみ(慈悲)、老子の知恵(仙道)、孔子の博愛(仁=惻隱之心)、ヒンズー教のカルマ、イスラム教のサラームは、イエスの愛の運動に合流し、地の上、天の下におけるアジア民衆の歴史を形作つた。

この物語は朝鮮の地に届いた。丁若鏞^[2]の「Praxis of Life実学」は、太古の堯^{ヤオ/ぎょう シュン}と舜^[3]の理想国家が19世紀の朝鮮民衆のために社会の変革とビジョンの基礎として用いられた実例である。似た例は中国や日本で見いだすことができる。仏教の伝統では、弥勒菩薩が苦難を受けている民衆のメシアである。韓国の仏教者の知識人は、この仏教の伝統を民族解放闘争に用いた。マイトレーヤ(弥勒/ミルク)は、朝鮮で、特にその南西部で、苦難を受けて抑圧されている民衆の間で希望のメシア的菩薩である。もうひとつの伝統は新宗教の東学である。それは韓国の伝統で、儒教、仏教、仙道、巫教、キリスト教が習合し、エキュメニカルに総合された、新しい命へのビジョンである。東学は、韓国社会を変革し、日本植民地主義からの民族の独立と解放を支え、その後の、人権、民主主義、民族の再統一、生態学的持続性を求める運動を育むのに、メシア的な偉大な役割を果たした。

イエスの愛の運動の力学は、破壊と死の諸勢力に対応する。ローマ帝国の下で権力に対する原初の愛の母型^[4]は、我々の省察にとって軸となる基盤である。帝国の現在の状況に取り組むにあたって、その権力を理解するのに、ローマ帝国の権力に抗したイエスの愛が鍵になる。イエスの運動の地政学的な軌道は二重である。ひとつはローマに対するガリラヤの地政学である。イエスの地政学的な観点はガリラヤからローマに向かう。もうひとつは神の支配の、カイロスの地政学である。神の支配は、帝国の地政学を変容させる。それは、すべての生けるものへの愛の政治である。

[2] 丁若鏞(1762-1836)は朝鮮王朝末期の哲学者で、ローマ・カトリックへの初期の改宗者。実学の最も偉大な思想家として知られる。

[3] 堯と舜は、儒家が神聖視する中国古代(前24世紀)の皇帝。

[4] "Matrix": 金容福師に尋ねたところ、ここでのmatrixは「母體織組」という造語をもって訳せるだろうとのことだった。この理解を踏まえた日本語での表現として「母型」と訳してみた。

今日、それは、グローバルな市場および帝国の「権力と愛」の力学となる。西欧と、それに続いて起こった非西欧世界における近代的発展の動きは、グローバリゼーションの過程を強要してきた。このプロセスは、西欧の産業化と、それに付随した西欧の市場拡大のための植民地化と共に始まった。その中心的な原動力は、グローバル化する資本主義の力であった。第二次世界大戦後と冷戦後の軍事的秩序は、質的に高まった仕方で根本的に同じ傾向を反映している。現代の技術はこのグローバル化の過程の基幹的要素である。近年のコンピューターの電子工学の発展は、この過程の急速な拡大を通して加速してきた。それは全世界と宇宙に巨大な変化をもたらしている。グローバリゼーションの過程に存する死の多様な諸力による破壊によって命が脅かされていると信じる者もいる。最近までは第三次世界大戦が命への究極の脅威であると見なされていた。冷戦後の状況が平和の時代を拓いたと信じる者もいるが、一極化した軍事的ヘゲモニーによって世界はより大きな危険の中にあると信じる者もいる。戦争は、その規模は限られているものの、その強度は全生物を滅亡させるものであって、戦争を作り出す一極化した覇権主義的軍事国に拮抗する軍事国は存在していない。生命体の遺伝子操作は、どんな結果をもたらすのか確かでないままに、命の過程へと深く侵入した。これは電子工学と人工頭脳学の発展と結びついている。近代の産業文明化がもたらした環境破壊は、いまや命への巨大な脅威を突きつけている。

グローバルな市場、グローバルな帝国、グローバルな技術官僚制の共生関係

マンモンの愛、すなわち市場の霊的な次元としての純然たる欲望、国民国家とグローバルな帝国の政治的共同体の覇権主義的な悪霊、通信と情報媒体の世界における偽宗教的/物神的な気運、これら全ての領域においてある種の悪霊が猛威を揮っている。人間の欲望が、適者(強者)生存の哲学の論理、思想、機構を作り出しつつ、集合的意思に変わって、破壊、暴力、戦争、死の諸力が、道徳的、文化的、哲学的、宗教的、霊的な言語や象徴の形をとっている。

新しい充溢した命に向けた愛のメシア政治、命への愛のイエスの運動は、次のような神学的収斂において接合され、提起される。

○ 神と命：神は、それほどに、世を愛された…

命についての聖書の見方は詳しく論ずるまでもなく明確である。聖書の幾つかの箇所を参照するだけで十分である。神は宇宙のすべての生けるものに命を与える。すなわち、神は、命を創造する者、養う者である。神は、人類に対してだけ、あるいはキリスト教共同体に対してだけ、命の基であり、命を与えるものであるわけではない。全宇宙に対して、そうなのである。命の広がり、宇宙的なものである。

神の創造という行為は、暗闇（死と悪）と混沌（荒廃した世界）に打ち勝つことである。神は、死に対する生の動的な運動の中心にある。命は、死から永遠なる喜びである新しい命への運動である。神は出エジプトの運動、預言者の運動、全宇宙における新しい命への終末論的運動の中心にある。

神は命を霊（息）と言葉によって創られた。聖書は、命が聖霊から発することを、こう主張している。聖霊は、神の正義、平和、シャロームに向かう動的な力である。聖霊は、宇宙にある命に、人間と他の自然生物の全ての相を包含する主体性を与える。

○ キリストと命：メシア的な命の祝宴が、命への愛の運動の核心である

黙示録 21 章と 22 章は、メシア的な命の祝宴のクライマックスの終末論的力学を、はっきりと示している。そこにおける新しい天と新しい地、および新しい共同体、すなわち神のオイコス（家）は、全ての国々と全宇宙が永遠の（充溢した）命にあずかる、メシア的な命の祝宴の地政学的な場である。水、果実、木々、そして命の聖霊が、メシア的な命の園を構成する要素となっている。創世記とイザヤ書における神の創造行為が連想される。

[5] 2009 年、「生態学的負債」に関する WCC 中央委員会でのヒアリングで、金容福師は、この根拠となる聖書箇所として、創世記のノア契約の記事を挙げられた (9:12, 14-15)。 (西原廉太「<いのちの神学>の可能性」, 2009, WCRP 平和研究所研究会)

神の支配に向けたイエスの運動（ルカ 4 章）とローマ帝国に抗するイエスの運動は、死の支配と権威^[6]に打ち勝つイエスの十字架と復活において実現した永遠の命が核になっている。イエスの生涯と働きは命の運動を構成する部分として理解されるべきである。イエス運動は、彼の行動、働き、教えを通して、新しい宇宙における永遠の命のための運動を打ちたてるものである。

繰り返して言うが、メシアの霊は、メシア的支配の文脈における世界の新しい命に向けた運動の中心的な力である。全ての民と国々、いやすべての生けるものは、その新しい宇宙（新しい地政学）における永遠の命の祝宴に招かれているのである。

○ 命の運動における聖霊

聖霊は既に神の被造物の中で働いている。出エジプト、ヨベルの年、預言者の運動、命のための新しい時代（終末）に向けた黙示録的な運動で示されているように、聖霊は命のための正義とシャロームを打ち立てる中心的な力である。聖霊は、命の、新しい永遠なる命の、主体性と力学を確立する愛の媒体である。聖霊は、自然、共同体、世界の命の深みに存する。聖霊は、地政学的な限界を持たず、自然や人間の共同体によって規定されるものではない。

聖霊は全世界で命の運動に希望と想像力を与える。「異邦人は彼の（イエスの）名に望みをかける」（マタ 12:21）、「この秘められた計画が異邦人にとってどれほど栄光に満ちたものであるかを、神は彼らに知らせようとされました。その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です」（コロ 1:27）。メシア的な希望は、その射程とその内的な力学において宇宙的であり、死の力に打ち勝ったキリストの復活によって定められている。この希望は、世の悪と死の力に打ち勝つためのメシア的な運動に向けたメシア的な精神を人々の間で呼び覚ます。すべての民（被抑圧者）は、新しい天の下、新しい地にある新しいオイコス（家）におけるメシア的な命の祝宴に招かれている。聖霊は、苦難を受けているすべての民と呻きをあげている宇宙に充満する、命と希望の「力」である。

[6] 支配と権威 = the principalities and powers : エフェ 6:12 の表現を意図的に使っていると思われる。「支配と権威」は新共同訳での訳。

このように、三一の神は、宇宙的な領域におけるすべての生けるものの命における三位格の収斂において理解することができる。中心的でカイロスの太極（オメガ）にあって、神は、三一の収斂に於いて、創造者であり、神の民と全宇宙の命を与えるもの、命を愛するものである。新しい天と地における新しい命のメシア的な祝祭は、永遠の命の成就である。聖霊のカイロスの臨在は、呻きをあげている宇宙のすべての苦難を受けている民と国々における命の動的で充満する「生命力」である。神と命（神の創られた命）は、命の園を主要なものとする宇宙の物語における協働者である。これが、すべての生けるものの命を愛する神の宇宙的政治である。

今が、八つの相における愛のカイロスの時間である：

- 1) すべての生けるものは自らの命の主権者のな主体である。命に与り（参与）、分かちあう（相生）ものである。
- 2) コイノニア：霊的、文化的な生活が充溢し、祝祭に表される、愛の精神と共同体
- 3) 愛のための公義と正義の契約：正義、平和、共生の文脈で、弱いもの、貧しい者、障がい者が守られる。
- 4) 命と生活の糧を管理するオイコノミア
- 5) 命の健康と健全さ
- 6) 命の政治：すべての生けるものの命の権利
- 7) 命のための地政学的な平和
- 8) すべての生けるものにおける命の生態学的な管理

そのような命の知恵を求め、また希望のエキュメニカルな実践として、我々は東と西の収斂を追求する。それは、宗教的、哲学的な知恵の収斂であって、命のための連合的収斂の運動に基づく。これは多重的な収斂、いわば諸収斂の収斂である過程である。

愛はすべての命の知恵の収斂であるとして、命の統合的研究（ゾーエソフィア＝生命学）を、すべての生けるものの命に向けられたイエスの愛の宣教を前進させるための学問的、専門的な方法として提案したい。この愛の収斂は、命の宇宙のための宣教論的なアルファでありオメガである。

生命学：命は、共生の生ける主体である

命の総合的、総体的な理解を追求するにあたって、我々は命のいかなる還元論的、断片的、部分的な理解も拒絶する。我々の主たる命題は、主体としての命は、その物語を通して知られるということである。命の物語は、命の生のあり方を叙述する最もよい方法である。前提とする考えは、命は客体ではなく主体であるということである。

これは重要な命の理解である。命は、断片化されるべきでなく、その細かな部分に還元されるべきでない。その主体性は、生けるものの全体であって、生ける身体の部分あるいは小片ではない。

このことは民衆の主体性と相似する。民衆は全生活を創造する主体である。民衆の主体性は、民衆の物語の全体を通して、行動、思想、感情と感性、信念と精神に現れる。命の主体性は、命の物語を通して、行動に、思想に、感情と感性に、信念と精神に現れる。フェミニスト学は、女性の苦難と解放に向けた取り組みの現実を理解するため、体と心において自らの人生の主体となるため、物語を最善の方法として用いる。フェミニスト学は統合的研究の優れたあり方である。

我々は、これを「ゾーエグラフィ＝命の物語＝生命伝記」と呼ぶ。バイオグラフィという言葉は用いない。それがたいは個人の物語を指すためだけに用いられるからである。我々は民衆の物語を指して「社会伝記」を用いてきた。民衆の主体性の社会的、共同体的な次元を表すためである。ここでは、「ゾーエグラフィ」は、命（生けるもの）全体の統合的研究を指すのに用いられる。それは、命全体の、生物学的、生態学的な次元、また社会的、文化的次元を含むものである。

この議論において、命はすべての生けるものを含む包含的な範疇である。人の命、動物の命、草や木の命の間に差別をつけることは恣意的である。これら全ては、ひとつの相関する命の網状組織を成しているからである。断片化や還元化は抽象的で恣意的である。有機物と無機物に差別をつけることさえも抽象的で恣意的である。命は非有機物質なしに存在できないからである。

命は、生けるものの包含的な網状組織として生きている。我々は、それを「共生の網状組織」もしくは公同の命と呼ぶ。現実には、世界には、ただひとつの公同の命しかない。生命伝記は、すべての生けるもの全体の命の世界的な物語なのである。

張會益^[7]は、全体的な（グローバルな）命のみが、命について考察しうる概念であると主張している。他の命についての概念は断片的であって、全体的命の派生物に過ぎない。彼は、個々の人間という観念は、究極的には有効な命の概念にはなりえず、動物や植物の個体という観念についても同様に考えている。有効な命の概念は、相関的な命の網を全体として含むものでなければならない。彼は、全体的な、あるいはグローバルな命の概念は、科学的な議論に基づいていると主張する。同時に、彼は、この概念を、アジアの宇宙論的な命の理解によって橋渡しすべきであると主張する。この提案は、どのような命の概念であれ、生物学的、社会的、生態学的な次元を含むべきであり、さらに文化的、靈的な次元も含むべきであるとする点で重要である。

主体としての命は、全体的な命のあらゆる次元を含む。「主体」が意味するのは、それは社会的、生物学的、生態学的であるだけでなく、靈的であり文化的であるということである。それ故に全体的命を理解しうる唯一の方法は、命をその物語によって叙述することである。

命は全世界の主体であって、全世界が命の身体である。共同体が命の身体であると理解するのは容易である。共同体は、命の全ての次元、生態学的、生物的、社会学的、文化的、靈的な次元の網状組織である。命の統合的な研究がこの命題を明確化するであろう。また、アジアの哲学は、これを容易に説明することができる。例えば、個々の自己、家族、国家、世界は、ひとつであって、同じ命の実体であると。

命の自己性ないしは主体性は、例えばデカルトの自己概念のような、近代科学の認識論的な自己あるいは主体ではない。それは思考と判断力を持つだけでなく、美学的な知覚力と靈的な感覚を持つ。それは命の未知の神秘に基礎づけられている。それは創造的であり、開かれている。それは対象化されない。ただし、それ

は身体的、物質的、生物学的、社会的なものである。それは対象物あるいは抽象的な本質に還元され得ない。それは超越的なものでさえもない。

主体としての命は、命の全網状組織の文脈において、それ自体を誕生させる。命の誕生と死は、この文脈において理解されるべきである。命の生殖は、生物学的な用語によっては、すなわち単に細胞と遺伝子によっては説明することが出来ない。それは単なる生化学的な過程ではない。というのも、それには、生物学的な次元を超えて、命の内在的な主体性が関与しているからである。生けるものの誕生は、単に内的な過程であるわけではなく、自然環境、社会環境、文化環境と緊密に関連している。これは人間についても他の生けるものについても妥当することである。

おそらく全体的命のレベルでは、生殖の主体は明瞭であって知覚が可能ならずである。全体的命は、生けるものの恒常的な生殖と生産の活動の、動的な網状組織である。ラブロックが主張したように、ガイアとしての地球は、全体として生けるものである。それゆえ、地球は、丸ごと生けるものとして、主体性を持っていないなければならない。それは純粋に生化学的または物理的な媒体であると理解することはできない。命の主体性は、マイクロなレベルあるいはマクロなレベルで、生物学的、生化学的、物理的な仕方では説明することはできない。それは未知の次元を持っているのである。

誕生と再誕生の生産と生殖の動態は、ひとつの相互的協働と公同の命の精妙で全体的なネットワークになっている。そこにおいて、命の主体は、個人主義的でも断片的でもなく、共生的存在である。いかなる生けるものの主体性も、マイクロレベルの細胞と遺伝子の緊密で有機的な協働において理解されるべきである。それは、生けるものの共生関係において理解されなければならない。それは有機的要素と非有機的要素の相互作用において理解されなければならない。いかなる生けるものも、この「公同の命、協働、共存」の複雑な母型において主体である。しかし、それは神秘である。命が、その存在の客体ではなく主体であることは神秘である。

命は、それ自体で育つ。命の成長は、ただ自然な、生物学的な、生態学的な動態として理解することはできない。むしろ、それは、命が内的な命を経験して外的な環境と相互的に作用し合う主体であることを示唆する。命は、生けるものの網状組織との相互依存関係に

[7] Prof. Hwe Ik Zhang (b. 1938): ソウル国立大学名誉教授、関連する論文に "Onsaenmyeong" (Global Life), 1989, "Humanity in the world of life", 1988 等がある。

において、それ自体を養い、育てる。これが、その主体性の鍵となる表現である。

命は生きることを学ぶ。これは自己教育の過程である。命は環境から学ぶ。命は他の生けるものとの相互関係の経験から学ぶ。生けるものは互いから学び合う。過去から学び、現在から学ぶ。未来から学ぶことに対して開かれている。生けるものは、生きる状況に適応し、自己教育の過程を通して命への障害物を乗り越える。生けるものの、この自己教育過程は、単なる本能であるとか自動的な機能に還元することはできない。命は、決定論的な仕方では理解できない。

命は自らを癒す。傷ついているとき、または健康を害しているとき、命は自らの疾病を治し、その健全さと健康な生活のバランスを回復する。アジア的な健康は、命は自らを癒す力を持つという観念に基づいており、医療は主として命の自らを癒す力を強めるために行われる。命は自らを癒す主体である。

命は、生けるものの中で、そしてその環境と、コミュニケーションを行う。植物と虫は互いにコミュニケーションを行っている。このコミュニケーションは相互的である。生けるものの命は、コミュニケーションの記号と記号論を必要とする。植物、動物、そして人間は、等しく、相互的なコミュニケーションを行うことができる。我々はこのコミュニケーションの過程を完全には理解していないが、命がコミュニケーションの主体であることを示すものは十分にある。

命は成熟し、自らを満たす。命はその充溢に向けて自らを実現する。命の成熟と充溢は、自然のさだめでも、機械的な過程でもない。それは目的因もしくは主体としての命が向かうさだめを必要とする。すべての生けるものは自己充溢の自らのさだめを持っているように思われる。これは自己性のもうひとつのしるしである。

命は自らを創造し、また再創造する。命は生けるものと創造的に相互的に関わる。創造的な主体性は、文化的なレベルのみならず、生物学的、進化論的なレベルにおいても理解することができる。生けるものは創造的な存在である。生けるものの創造的な活動は、命において新しいものを創造する過程を伴う。進化論的、文化的な創造の過程は、命を構成する上で欠くことのできない部分である。

命は意味の世界に生きている。生けるものは、共同の命の網状組織の文脈において、命の意味と世界の意味を創造する。命は意味の共同体の文脈で理解されるべきである。生けるものは意味を創造し、命の意味とそれが生きる世界の意味を満たす。

命は霊である。生けるものは、物質的であるだけでなく、霊的である。霊であるだけでなく身体であり、共同体的であるだけでなく個体的である。命の霊は、人間だけに限られたものではない。霊は、宇宙的、生態学的、生物学的、文化的、そして宗教的である。命のこの霊的な主体性は、生物学的な問いに還元することはできない。それは文化的な問いであり、宗教的な問いである。しかし、霊は、その身体を抜きにして、幽霊のように理解されるべきではない。霊は、生きている有機体において、また生けるものの共同体において、身体的で生態学的な現実である。

命の主体性は、統合的な仕方によって、より十全に理解することができる。それゆえに、我々は命の物語を提案しているのである。生命伝記は、命について語り、学ぶための、もうひとつの枠組みである。この学びで我々が関心を持つのは、命の充溢のための、命の知恵である。我々は命の科学的な知見を排除しない。我々は、それを命の知恵の総合的な文脈の中に置き、変形しているのである。

命の知恵を学ぶために、我々は東西の命の知恵の融合だけでなく、統合的、学際的な研究を提案する。これが命の統合的研究の意味である。それは生命伝記＝命の物語から始まる。

死に抗する命の生命伝記は宇宙的な愛の物語である

命の物語（生命伝記）は、命の充溢の物語であり、それは生けるものの死や破壊から始まる。命の起源や誕生から始まるのではない。

近代科学的な生物学は、宇宙の歴史における命の起源の問いから命の研究を始める。我々が手にする答えは、高度に仮説的、還元論的で、時間的、空間的にはるかに隔たったものである。それは近代科学の観念の延長であり、解釈であるとも言えるだろう。近代科学における命の起源の問いは、それ自体の限界を露呈している。そこでは命の歴史もまた、最初の単純な生命体とその進化の過程を辿ることにおいて、とても還元論的で、抽象的である。これは命の知恵を学ぶには、きわめて限定的な方法である。生命伝記は、新たなレベルへと常に進化する複合体の物語である。起源と構成要素を辿っても、命の最も単純な要素を還元論的に探究しても、命の物語の全体を適切に語ることはできない。

物語は全世界の生けるものの命の現実、経験、動態を明らかにする統合的な方法である。物語は、命の諸相を結びつける方法、時間と空間の点で命の経験を紡ぎ、総合する方法である。事実、物語は、命のユニークな物語を語るための、それ自体のユニークな時間と空間を組み立てることができる。物語は、命の現実を、それを閉ざすことなく語る方法である。それは開かれた物語である。それは科学的、客観的な因果関係の厳密な連鎖に還元することはできない。物語は命の意味と知恵を明らかにする方法である。それは全体論的である。物語は科学的、客観的な命の知見を統合し、それらもまた命の知恵を構成する要素となすことができる。

生命伝記（命の物語）は、命の知恵の探究において、地上における命の現在の状況から始まる。それは（カイロスの仕方で）〈いま・ここ〉における命の経験に取り組む。そして我々は現在と将来についての問いを開くために、過去の物語の問いを尋ねる。命の物語は、近代的な絶対的時間あるいは相対的時間の時間的枠組みによって決定されない。命は、それに固有のさだめ（時間）を持つのである。

生命伝記は、生けるものの具体的な地理的、生態学的状況における、とてもローカルな物語である。それは時間と場所を超越せず、「抽象的で普遍的なもの」にならない。微細な部分や高度に抽象的な本質に還元されることを拒絶するからである。命は、それ自体の場所に住まいを持つ。我々は「文化人類学」の統合的な方法論を想起して、生命伝記に発展させ、適用することができる。

生命伝記は、命の共生の物語である。生けるものは命の網状組織を形づくりながら共に生きる。人間は、動物、虫、植物、そして多くの微生物と共に生きながら、共同体を形づくる。相互的に支え合うネットワークを持つこの共生的な命において、人間と他の生けるものを分けることはできない。生命伝記は命の共生的な主体性の表現である。共生性はマイクロおよびマクロな宇宙的枠組みにおける命の身体の表現である。

命の統合的な研究で最も重要な要素は、すべての生けるものの共生性の物語であろう。我々は、いかにして、すべての生けるものの、ことに人間と他の自然生物の、共なる命の物語を見いだすのか。共に生きることの第一義的な様態は、競争ではなく、協働と相互的な適応である。生物の科学、生態学の科学、社会科学、人文科学は、生けるものの命の統合的な物語である生命伝記の文脈において、一緒に研究される必要がある。

その物語は命の人間の主体から始まることはできない。それは、人間、動物、植物、土壌、そして他のすべての生けるものも含み、いわゆる非有機的な要素も含む、生けるものの共生的共同体から始まらなければならない。生けるものの共生的共同体は、人間中心の実在ではなく、命を中心とする正体である。相対的に言えば、産業化が始まる前の農村共同体は、そのような共生的共同体の生命伝記を持っていた。そこでは、相互的な命（相生）のために互いに対して適応、変化しながら、すべてが共に生きていたのである。



命の物語は恣意的な死と破壊を克服する物語である

命の物語は、死と破壊の力と弁証法的な関係にある。(女性と男性の)人間の歴史において、命は、病、飢え、暴力、戦争、その他の社会的、生態学的な諸原因、自然災害や人為災害による恣意的な死を克服しようとするものである。生命伝記のドラマにおいて、命の主体は命の主人公であり、死と破壊の媒体は命の敵対者である。相似した結びついた仕方、すべての生けるものは各々のさだめを満たすために死と破壊の諸力に打ち勝つために闘っている。

「自然死」は命の部分に過ぎない。命をすべての生けるものの網状組織として理解するならば、死は命の物語のひとつの成就の瞬間である。虫の命において一羽の蝶の死とは何であろうか？いも虫の死とは何であろうか？それは虫の物語のひとつの瞬間である。共生(共同の命)において命のすべてを見るならば、一個の生けるものの自然死は、命の物語(生命伝記)の全体においてひとつの瞬間であるかもしれない。人間は、生物学的、医学的な方法によって自然死を克服し、永遠の命を得る道を探してきた。それは限界を超えて自然な命を延長しようと企てる人間の恣意的な「思い上がり」である。

命の共生的な網状組織自体にも死はある。例えば、相互的な犠牲による相互的な養いの連鎖がある。人間は植物、木々の果実、動物を食べる。それは命の園における共生的、相互的、相関的な命の網状組織となっている。「自然死」は新しい命の始まりのための終わりとして見られよう。しかし、生物学では、これは、最も適合した者、強い者が生き残る力の争いの連鎖として考えられている(ダーウィニズム)。しかし、アジアの知恵では、それは互いに仕える網状組織である、公同^[8]の命、相互的な命、共生的な命として見られるのである。近年においては、このことは、「持続性」と呼ばれている。

生命伝記、命の物語には、不正な力で起こる恣意的な死と破壊の瞬間がある。その主要な例は、人間による命の破壊である。この恣意的な殺害は21世紀におけるグローバリゼーションの過程で大幅に増大している。

命を破壊している人間の営みで最も影響力が強いのは、近代の科学と技術、産業と軍事の技術官僚制である。近代の科学と技術の基礎において、命自体とすべての生けるもの及びその構成要素は、認識論のレベルで客体化されている。最小のかけら、細胞、遺伝子に断片化され、還元されている。命は、科学的理論の恣意的な構成物に変えられている。

技術官僚制、組織化された技術は、命を制御し、支配し、破壊している最も影響力のある機関である。科学-技術は価値中立的なものと思われるかもしれないが、それは認識論的に、その客体、すなわち命とすべての生けるものを、全体主義的な支配のもとに置いている。科学-技術は、「人間的」科学が描く図に従って、命とすべての生けるものを、操作し、変化させ、歪めている。技術官僚制は、グローバル市場の支配と権威によって、その利益のために動かされている。

技術官僚制的な社会体制は、グローバル市場と帝国の支配の下で、グローバリゼーションをおし進めている。それは生態系の破壊、汚染、生物圏の操作、飢餓と貧困による人間の命の破壊を伴い、疫病や全滅戦争を広げ、結果として社会的暴力、政治的抑圧、経済的搾取を引き起こしている。命の全体が脅かされている。この文脈において、生命伝記はグローバリゼーションの過程に密接に結びついている。

A. 平和の命：戦争と命の破壊に抗して

人間の歴史は、人間の諸集団の間における戦争、自然に対する戦争の歴史であるが、21世紀に世界の地政学は戦争の兵器を創造する過程となった。20世紀は二つの世界大戦を経験した。今や、科学と技術は、人口知能論と情報化の進展と共に、全面的な全滅戦争によって人間が命を完全に破壊することを可能にしている。これはグローバルな帝国の業である。

新しい命は、命をなす全てのものの平和のための安全保障の母型を要求する。それは全てのレベルにおいて戦争を克服することを可能にするものである。全てのレベルにおける研究と実践を伴った包括的な平和運動が地球上の命のために必要とされている。宇宙的な平和は、天と地の全てに充満する宇宙的な憐れみである。

[8] 日本で言えば、南方熊楠(1867-1941)や今西錦司(1902-1992)が想起されよう。

B. 公正で健康な生活：窮乏、飢餓、貧困に抗して

経済の歴史的な発展は、命に対して混合して矛盾した祝福となっている。オイコス（家）＋ノモス（法）＝オイコノミア（経済）、すなわち家と庭で命を守るために世帯を管理することが、経済の意味である。経世済民が東アジアにおける経済の観念である。それは「經典の規範に従って人々を助ける」ことを意味する。

多くの異なる形で表される人の欲望は、経済が成長し、新たな段階に発展するにつれて、窮乏、飢餓、そして貧困を引き起こしてきた。富は、人の歴史の各段階で、権力者によって蓄積されてきた。今やグローバルな資本とその多国籍機関が、新興のグローバル市場を支配している。それらは科学と技術を独占することで、ほとんど限りのない権力と影響力を手に入れている。近年、金銭 - 金融権力 - は、民衆を徹底的に犠牲にしてきた。民衆の間における全ての交換と取引はグローバル市場の諸機関によって、資本の飽くことのない貪欲を満たすために支配されている。利潤の最大化と絶対的な支配が、それらが興じるゲームの名前である。貪欲が命の破壊の根である。

C. 連帯のネットワークに直接的に公同的に参与する命：抑圧に抗して

政治の諸制度は民衆を多くの異なる仕方で抑圧してきた。専制、独裁、帝國的支配、国家全体主義、国家独裁、軍事独裁、宗教と政治の共生、植民地主義、多くの異なる形における思想的柔軟性のない統治を、国々と諸民族は被ってきた。西欧の自由主義的な民主主義は、民衆の全面的な参加をもたらさなかった。それは人権や個人の政治的自由などの自由主義的な政治的権利を増大させたが、それはまた権力者と富裕者による弱者と貧困者の支配に扉を開けた。近年の新自由主義的な発展は、自由主義的な政治的民主主義に続くものである。自由主義的な伝統は、グローバル市場の統制にも国家市場の統制にも失敗した。

民衆自身がグローバル市場への直接的な参加と介入および既存の政治諸機関の根底的な民主化を要求している。まことに、民衆は、自らの政治的自己性を、地方、国家、地域、世界のレベルで、実現しなければならない。

これは、新旧のグローバルな支配と権威に相応した、地方・国家・地域・世界における参加と連帯のネットワークを必要とする。支配と権威によって定められた境界線を横断するグローバルな参加と宇宙的連帯のために、新たな政治諸機関があらゆるレベルで必要になるだろう。これは全世界の命への愛のエキュメニカルな政治の新しいビジョンである。これはすべての生けるものは命の主体であるということの肯定である。

D. シャロームなる命（すべての生けるものの幸せを確保すること）

人の歴史は、強者が弱者を食らい、適者のみが生き延びることのできるジャングルである。古典的な諸矛盾 - 民族と人種、階級とカースト、ジェンダーと社会的身分 - は、社会的暴力の渦を生じさせる。このジャングルには正義はなく、共同体はなく、協力も平和もない。グローバリゼーションは、いわゆる新しい社会的ダーウィニズムによって決定づけられる新たな社会的過程をもたらした。情報を持つものと持たない者における紛争と矛盾のような、新たな紛争と新たな矛盾が現れている。不正義が深まり、紛争の強度が高まって、暴力とその循環的な加速度を増大させている。

人々に競争のイデオロギーを礼拝させ、用いた手段や方法に関係なく勝者を賛美させる新自由主義のイデオロギーに対抗して、社会正義、社会保障、社会的平和、そして社会的和解を再設計する必要がある。地方、国家、グローバルな共同体のあらゆるレベルにおける公同の生活のために民衆は新たな取り組みを必要としている。

正義と平和と調和に基づいた生き生きとした人間共同体を築くために、社会福祉国家と社会主義国家の双方の社会保障の仕組みが転換されなければならない。その前提条件となるのは地域共同体における民衆の参加であろう。そのような参加は、世界の至るところにめぐらされる公同の人間の安全保障のネットワークに民衆を結びつけ、民衆を宇宙的な共生に一体化させる。

E. 豊かな意味と優れた美をもつ命：文化的生活の砂漠化に抗して

文化は文明の魂である。それは公同の命の芸術であって、それを通して民衆は自己同一性、価値指向、美的感覚を獲得し、命の祝祭を楽しむ。文化は民衆に知覚装置を与え、理解への方向付けを与える。文化は、全宇宙の民衆にとって、命のための知恵の貯蓄庫である。それはすべての生けるものへの愛の源泉である。

民族的、国民的、文化的アイデンティティ - 共同体生活の内なる核 - は、グローバリゼーションの影響下で急速に腐食されている。力を持たず、周縁化された民族的、国民的共同体は、特に影響を被っている。

文化は命の知恵を内包する。文化は命の霊的な住まいである。霊性は命の欠かすことのできないエネルギーであるが、グローバリゼーションの過程で蝕まれている。近代の哲学、科学、そして技術は、命の霊的な核を縮減し、あるいは根こぎにし、理性へと還元してしまった。

文化の宗教的次元が、従って命そのものが、根において絶たれたのだ。宗教は文明の実質であり、文化はそこにおいて宗教的真理や霊性が表現を見いだすところの現れである。近代は宗教を合理的な最小限のものに還元し、命の霊的神秘は合理的なるもの名において抑圧されている。宗教的活力の抑圧は命の活力に悪影響を及ぼしてきた。

F. マクロな、そしてミクロな宇宙における活力ある命：命の破壊に抗して

近代は、人間共同体の命と自然の命の間に致命的な分裂をつくりだした。それはまた、命の実相を生化学的な過程へと縮減した。これら二つの陳述は、命の（誤った）理解における近代的な要素還元主義の役割を概括している。

命は全体である。命は、命の園で世話をされるべきものである。命の園芸は、宇宙の命をその全体性と完全性において尊重することを求める。宇宙の命の充実は、現在の誤った理解と操作に打ち勝つような、全く新しい命のパラダイムを求める。命は、死と破壊に抗して榮えねばならない。

G. 祝祭における至福なる命

命の至福の極地は、神を賛美し、神と共に命を楽しむことである。そのような命の至福と祝祭の礎は、神への信仰に基づいている。神は、シャロームの内にある命の契約を我々と結ばれた。命は、それが死の力を乗り越えるときに、命である。命は、それが永遠の次元を持つときに、真の命である。命は、それが完全に十分に満たされたときに、真に命である。これが、聖書の教えによる新しい命の基礎である。この至福に満ちた命は、地上で、カイロスの仕方で実現されなければならない。これが命の知恵の始まりであり、成就である。

- IV -

結

世界のキリスト教は危機にある。キリスト教西欧は、いや実に全世界のキリスト教会は、「全地キリスト教世界」が世を救うという幻想に囚われている。全ての命の破壊と死の可能性の問題に取り組むための神学的展望は破綻をきたしている。我々は、強い切迫感をもって、省察のためのこれらの案を提出するものである。

また、世界のクリスチャンは、文化的にも宗教的にも、キリスト教世界にではなく、諸世界宗教を背景にした世界に生きている。これは大きな変化である。キリスト教世界の単なる拡大あるいは結合による拡大は継続できるものではない。状況が要求するのは、宇宙のすべての生けるものへの愛の新しい地平に向けた収斂である。対話、協力、連帯が、オイクメネの宇宙的終末点として見ることのできる、そのような収斂への手段となるだろう。この課題のために、すべての生けるものへのアジア人イエスの愛を回復し、復興しなければならない。アジアの命の知恵（ゾーエーソフィア）は、グローバル市場と帝国の破壊性に取り組むための収斂の力学を与えてくれるだろう。生けるものの命のための闘いがあるところにはどこにおいても、命の知恵と、ゾーエーソフィアの収斂の力学が立ち現れる可能性があるのである。

(2009年2月21日)